

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 83

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 1641. 瓦礫と湖
- 1642. 記号化以前の世界の中で
- 1643. 発達科学・教育科学・システム科学・ネットワーク科学
- 1644. マライン・ヴァン・ダイク教授との立ち話より
- 1645. 曲の公開に向けて
- 1646. 身体的・超越的投影執筆
- 1647. 絶え間ない創造活動の中で
- 1648. 夢日記と作曲がもたらす治癒と変容
- 1649. 中学生の頃
- 1650. 創造から始まり、創造に還る
- 1651. この顕現世界のドラマ
- 1652. あの頃のように
- 1653. 絵画的な音楽
- 1654. 待つ夢・探す夢
- 1655. ハイウェイ&マイウェイ
- 1656. 景観へのくつろぎ
- 1657. データリテラシーとプログラミングリテラシー
- 1658. 確信
- 1659. 転調と休符
- 1660. 曲中の句読点

一匹の大きなスズメバチが地面を這いつくばっている。近くからそのスズメバチを見てみると、頑丈そうなアゴを持っている。そのスズメバチは地面を這いながら、道端に捨てられていた一つの袋の中に入っていった。その袋はビニール製ではなく、布製であり、密閉されたものではなく、網目からそのスズメバチは呼吸をすることができる。

私はその袋に近寄り、袋の上部を閉めた。袋の上部に取り付けられている紐を持って、スズメバチごとその袋をどこかに持って行こうと考えていると、一匹のトカゲが袋の近くをのっそりと歩いていた。スズメバチはトカゲの存在に気づいたのであろうか、トカゲの後を追うようにして、袋ごと地面を這うように移動し始めた。その後を私も追いかけてみることにした。

すると、一匹のトカゲの後ろに、小さなトカゲが何匹も現れ、先頭のトカゲの後についていくかのように行進を始めた。行進の始まりに合わせて、突如として、袋に入っていたスズメバチは大きなコブラのようなヘビになり、袋を破って、トカゲを後ろから食べ始めた。何匹かのトカゲが食べられた時、近くで爆発音が聞こえた。まだ生き残っていたトカゲたちは、慌てて波のない湖の中に隠れた。

どうやら人間たちの戦争が始まったようだ。トカゲたちは湖の浅瀬に隠れ、石の後ろから人間たちの戦争の様子を眺めている。しばらくすると爆発音が止み、戦争が終結したようだ。トカゲたちが歩いていた先ほどの道は荒れ果て、瓦礫の山になっていた。私は瓦礫の山の一角に腰掛け、先ほどスズメバチが入っていた袋を静かに眺めていた。ふと視線を上げると、湖を背景にした瓦礫の山だけがそこに広がっていた。

そのような夢を一昨日見た。これは大学の入学式に出席した夢の後に見た夢である。一夜経ってもまだその夢の印象が消えない。二日前の夢を思い出していると、昨夜の夢についても自然と思い出された。

昨夜の夢の中で私は、巨大なサイロのような空港にいた。目的地は一切わからないが、国際線に乗ることだけは知っていた。サイロの最上階の近くの階が、荷物を預ける場所になっている。この空港がサイロのような形をしているため、この階も当然ながら円形の作りになっていた。

---

円の南端から北端に向けて歩くと、荷物を預けるカウンターが二つある。私の前に何人かの人たちがすでに並んでいた。しかし、それほど混雑していない。私は右のカウンターを使おうと思っていたが、左のカウンターにいる職員から、私の番号が呼ばれた。私の手には、「6番」と書かれた札があり、その番号が呼ばれたのである。

私は親切な職員の女性と二、三言葉を交わし、最後に一つ冗談を述べた。その場が笑いに包まれた後、私はその職員の方に送り出され、飛行機の搭乗をラウンジで待つことにした。最上階に上がってみると、どうやら違う航空会社のラウンジのようだった。引き返そうとした時に、歩いて階を移動するのは大変であるから、エレベーターを使おうと思った。だが、その最上階のラウンジにはエレベーターがなく、先ほどのカウンターがあった階にエレベーターがあることを思い出した。私はそのエレベーターを使って一階まで降りた。

エレベーターのドアが開いて目に入ってきたのは、都心の主要駅のような場所であり、無数の人たちが右から左へ、左から右へと、足早に歩いていく姿だった。無数の人たちが行き交う場所の脇に目当てのラウンジがあった。だが、通行人の誰もこのラウンジの存在に気づいていないようだった。ラウンジに向かって一歩足を踏み出した瞬間に、夢から覚めた。

天気予報によれば今日は晴れた。明日からは、天気の良い日が続くらしい。今日は午前中の打ち合わせを終えたら、ノーダープラントソン公園へランニングに出かけようと思う。2017/10/12(木)

08:29

#### No.286: Each Piece of My Music as a Developmental Milestone

I had some extra time last night. I was composing music a little bit. Once I started music composition, it was difficult for me to stop doing it. One hour passed quite quickly as if I were absorbed in time.

I could make a small piece of work yesterday, so I will share it with the public after I revise it tonight or tomorrow night. The point is how many small pieces of music I can make. It does not matter for me whether the quality is sufficient or not. In other words, I need to make a number of

---

etudes for myself as a composer. I want to intentionally publish my unsophisticated works to track my developmental path as a composer.

The first piece of my music would be what a child may be able to create. That is necessary until I can establish my robust knowledge and skills of music composition. Each piece of my music can be a milestone or time-series data to analyze my developmental path as a composer. 08:51, Friday, 10/13/2017

### 1642. 記号化以前の世界の中で

昨日私は、夕食を摂りながら、自分が日々従事していることは、記号創造の営みなのだと理解した。科学論文の執筆にせよ、作曲にせよ、記号を生み出す活動に他ならないのだとわかったのである。

発達心理学者のロバート・キーガンは、私たちは絶えず意味を構築することを宿命づけられた生き物である、と述べている。意味そのものは記号であるため、意味構築活動とはすなわち記号創造活動に他ならない。そして、そうした記号を何かしらの手段を通じて外側に表現するとき、記号創造活動は形を持ったものとして私たちに知覚される。結局自分が毎日行っているのは、こうした記号創造活動なのだという気づきに襲われたのが昨日だった。

そこからさらに考えていたのは、何かが新たな記号として生まれるということは、記号になる前のものが存在しているということだった。自然言語にせよ、音楽言語にせよ、言語による記号化の影響を受ける前の、生々しい存在がこの世界に存在しているようなのだ。端的には、記号になる前の何かがこの世界には溢れているのである。それを知った時、記号にならないものに対して、改めて畏怖の心を持った。一方で、未だかつて誰も記号にしたことのない生々しい存在を、この世界に記号化していくことが、一つ自分が果たすべき役割なのかもしれないと思った。

一昨日、記号化される前の蝶を見た。大学キャンパスに向かう最中に、近くのノーダープラントソン公園を横切った時、一匹の蝶を見つけた。その蝶が舞っている姿を見て、この現象世界に畏怖の念を持ったのと同時に、ある種の恍惚感を覚えた。私は最初、その蝶を見た時、「蝶」だと認識したが、一瞬にして認識以前の状態に引き戻されるような体験をした。つまり、蝶が蝶として記号化される前の状態に戻ったのである。記号化される前の蝶には名がなく、ひらひらと宙を舞う何かだった。

---

それを見ている最中、私はとても不思議な感覚に包まれていた。蝶が「蝶」という名前が与えられた瞬間にこぼれ落ちてしまうものと接触している感覚、と表現すればわかりやすいかもしれない。それがそれたる所以、その存在がその存在たる所以と自分が密着している感覚、と表現すればなお正確だろう。

記号化される前の蝶から視線を別のところに移すと、そこには記号化される前の無数の存在者で溢れていた。公園の池、芝生の上の草花の一つ一つ、道端に落ちているカモの糞、目の前を通り過ぎていく人たち、それらどれもがその存在たる所以の光を輝かせていた。この世界には、どうしてこうも多様性に溢れた存在者で満ちているのだろうか、と考えざるをえなかった。

この世界がこのように、多で溢れる形で創造されたのにはおそらく何かの意味があるだろう。一つの壮大なドラマの中に、自分も一人の存在者として生きているような気がしてならない。2017/10/12  
(木)08:51

#### No.287:Projective Writing and Connection with Unlimited Sources of Creation

I observed my writing process. The observation made me notice that I projected something beyond me onto a paper. More specifically, the projection has two elements. One is a somatic projection, and the other is a transcendental projection.

Whenever I engage in writing, I always have the whole of what I want to express. The location of the entity exists in the core of my body and beyond my physical existence. That is why I called the latter as a transcendental projection.

Both projections seem not to occur simultaneously. To articulate the sequence of the projections, the first step is a transcendental projection. I intuitively and immediately capture an invisible subject to write that transcends my physical body. Then, I embody the theme and project it onto a paper by writing.

Whenever I engage in writing, I always feel connecting with the unlimited sources of creation.

20:31, Friday, 10/13/2017

数日前に、大学キャンパスで偶然にも、博士課程に所属している仲の良いドイツ人のヤニックと出会った。何やら、どこかの学会で行ったポスター発表のポスターを、自分の研究室の前に張りに行こうとしている最中とのことだった。そこで少しばかりヤニックと立ち話をしていた。彼は発達心理学科に在籍しながら、特にアスリートの発達現象に焦点を当てて研究を行っている。

今回の発表は、レジリエンスの能力をダイナミックネットワーク理論の観点から研究したものだ。ヤニックの話聞きながら、やはり発達心理学の領域よりも、スポーツ科学の領域の方が複雑性科学を用いたアプローチに関しては洗練されていると改めて思った。すでに数多くの知見が当該領域には蓄積されており、複雑性科学の手法を用いて、アスリートの発達現象を研究している研究者も数多くいるという話を聞いた。

その背景には、人間心理のデータに比べ、アスリートの身体運動に関するデータは比較的集めやすいということが関係しているだろう。また、そもそも身体運動は非常に複雑な現象であり、複雑性科学の知見が最も活用されている生物学や生理学とスポーツ科学が密接に結びついていることも関係しているだろう。そうした事情もあり、実際に私は、ヤニックを始め、フローニンゲン大学に所属しているスポーツ科学者の研究に絶えず注目をしている。

特に、昨年所属していたプログラムのコーディネーターを務めていたルート・ハータイ教授は、私が最も注目をしている研究者である。ハータイ教授はヤニックのスーパーバイザーを務めており、ダイナミックネットワーク理論やダイナミックシステム理論の観点からアスリートの発達現象を研究している。先日公開された論文も非常に示唆に富む内容だった。

ヤニックも述べていたが、スポーツ科学の世界では、複雑性科学の知見を取り入れた研究は随分前から行われていたが、ダイナミックネットワーク理論を活用した研究はまだまだ数が少ない。そうした意味において、ハータイ教授やヤニックは、この分野における先駆者なのだと思う。ヤニックの話では、「スポーツ科学の重鎮にはなかなか理解してもらえないこともあるが、今は地道に研究を進めていく」とのことであった。その話を聞きながら、発達心理学の領域においては、ダイナミックネットワーク理論を活用した研究を行っている者はほとんどいないため、これから自分が辿る道もヤニックが辿っている道と近いものになるだろうと予感する。

---

発達科学と教育科学の両領域に対して、システム科学とネットワーク科学の理論や研究手法を活用していくことは、これからの自分の仕事の核になる。ここ最近では、この四つの科学領域をいかに架橋させていくかということばかりを考えているような気がする。

人間発達や学習というのは、ダイナミックシステム的かつダイナミックネットワーク的な現象であるため、何とか自分の研究にダイナミックシステム理論やダイナミックネットワーク理論を用いた研究を数多く行っていきたいと思う。そのためには、そもそも人間発達や学習に関する理解を深め、システム科学とネットワーク科学の領域により精通していく必要があるだろう。科学者としての仕事に限って言えば、発達科学、教育科学、システム科学とネットワーク科学に全てを捧げてほしいほどだと思っている。

発達科学はこれまでの探究の積み重ねがあり、教育科学についてはまさに現在進行形で探究を深めている。そのため、時間を作りながら、システム科学とネットワーク科学に関する知識を深めていくような試みに従事したい。2017/10/13(金)07:29

#### No.288: Toward the Day to Ceaselessly Write Academic Papers

I got up before six o'clock and felt that my body and mind were impeccable. My body, mind, soul, and spirit are being fulfilled. I started today's work a little bit after six.

I was thinking about the reason why my entire whole was in such an excellent state. One reason is that I was inebriated with delight of writing yesterday. Even though I was writing for an assignment of a course, writing provided me with an innumerable amount of elation and euphoria.

If I engaged in writing for my research, I could not image the extent of my rapture. As I wrote down in my diary, the day will come. That is the day when I begin to ceaselessly write academic papers until I reach the endless end. 06:51, Saturday, 10/14/2017



昨日も一日中、現在履修中のコースの課題に取り組み、その合間に、日本の企業人の発達支援に関する二つの協働プロジェクトの打ち合わせを行っていた。研究活動と研究成果をもとにした実務活動の中で、日々の生活が形作られていく。

非常に充実した形で欧州での一日一日が過ぎていく。今朝は六時に起床し、今日と明日は一日中、「実証的教育学」のコースで課せられている最終論文の執筆に時間を充てたいと思う。最初のドラフトを明日の終わりまでに完成させ、来週の木曜日をめどに、このコースを受講している友人二人にドラフトを送り、お互いの論文に対してフィードバックをし合うことになっている。

フローニンゲン大学に在籍することになってから、協働の意義を随分と身をもって理解するようになったように思う。自分が行っている研究活動にせよ、実務活動にせよ、自分一人の力ではどうにもならない。

先日、ふとしたきっかけで、昨年履修していたコースでお世話になっていたマライン・ヴァン・ダイク教授のウェブページを閲覧していた。ヴァン・ダイク教授の2017年に執筆した論文を眺めると、その数が随分と多いことに驚いた。カート・フィッシャー教授にせよ、ヴァン・ダイク教授のアドバイザーでもあったポール・ヴァン・ギアート教授にせよ、二人が科学者としてのキャリアを通じて300を上回る論文を執筆できたのは、様々な研究者との協働によるところが大きいように思う。

フィッシャー教授とヴァン・ギアート教授はともに、科学者としての力量は疑いようのないものであるが、彼らをもってしても、一人であれほどの論文を執筆することはできなかったであろう。他の研究者と協働し、協働論文を執筆していくことが、数多くの論文を生み出すことにつながっていたのだと思う。

ヴァン・ダイク教授に関しても同じであり、今年に出版した論文の中で単一の著者の論文は一つもなかったと記憶している。つい数日前に、教育学科の建物内にあるPCルームで論文を印刷していると、ヴァン・ダイク教授とばったり会った。実際には、論文を印刷している私の後ろから、ヴァン・ダイク教授が声をかけてくれたのである。そこで少し立ち話をし、数ヶ月前にヴァン・ダイク教授から教

---

えてもらった、来年の六月にアムステルダムで開催される国際ジャン・ピアジェ学会に研究発表の応募をした旨を伝えた。

ヴァン・ダイク教授も応募を済ませたのかどうかを質問してみると、その学会に参加するのを今迷っている、とのことだった。どうして迷っているのかを尋ねてみると、発達心理学科のトップから、ヴァン・ダイク教授に対してもっと論文を執筆するように、という通達がなされたそうだった。それを聞いて私はかなり驚いた。先日、ヴァン・ダイク教授のウェブページを確認した時に、今年に入ってからすでに多くの論文を執筆していたことを知っていたからだ。

もう少し事情を聞いてみると、どうやらそれらの論文はセカンドオーサーのものばかりであり、学科のトップからの通達は、ファーストオーサーの論文をもっと執筆せよ、ということらしかった。科学論文を執筆することが科学者としての仕事の評価を決定すると言っても過言ではなく、学会での発表も重要でありながらも、あまり学会ばかりに参加できない事情があるようだ。ヴァン・ダイク教授の話聞きながら、大学に所属して研究することの意義は計り知れないが、上から強制される形で論文など書くことはできない、と私などは思う。

他者から論文の執筆を強制されることがないほどに、内側の内発動機から論文を絶えず執筆し続けていきたいと思う。そうした日がやってくるのは、数年後になるだろう。その日に向けて、今とはとにかく、発達科学、教育科学、システム科学、ネットワーク科学の探究を地道に継続していただければ。2017/10/13(金)08:05

#### No.289: The Union of Scientific Work and Music Composition

I composed a tiny piece of music last night. It can be probably negligible and worthless from the perspectives of professional composers. However, I cannot overlook how valuable it is for me. I determined to compose music a couple of months ago. Since then, I have learned music theory and composition techniques from scratch. I know that I am a layperson in music composition, but what I am struck is how much I can feel enchantment through composing music. Writing academic papers and composing music generate the exact same amount of delight for me.

---

I was obsessed by a jocular notion before going to bed last night. It was that I might be the only person who could compose music on the basis of science (e.g., developmental science, educational science, systems science, network science, etc.) and philosophy (aesthetics, epistemology, philosophy of education, and so on). This comical conception encouraged me to devote myself to scientific work and music composition very much. 07:09, Saturday, 10/14/2017

### 1645. 曲の公開に向けて

昨夜は就寝前の時間を使って作曲実践に従事していた。シンガポール国立大学が提供する作曲実践に関するオンライン講座の資料を参考に、短めの曲を作ることに従事していた。16小節ほどの短めの曲をひとまず形にした。これから少しずつ、完成した小さな作品を公開していきたいと思う。

現段階の作品の質は極めて低く、子供でも作れてしまうような類いのものかもしれない。それでも、学習した音楽理論や作曲方法を活用して曲を生み出し、それを形にして公開していくことの意義を感じている。

論文や書籍、そして日記などの文章でも同じだが、批判を受けることを大前提として、創造物を公共の場に形として提示することの重要性を最近強く感じている。さらには、仮に誰にも全く見られなかったとしても、形として公開していくことが何より重要だということを強く感じる。

創造物を形にし、自己の中に所有するのではなく、それを公共のものにしていくことの中には、不思議な力があるような気がしている。それは、作り手の発達や成熟を促すような力だと言えるかもしれない。作品を作れば作るほど、そしてそれらを公開すればするほどに、作り手の中で何かの間違いないく深まっていく。

今日は無事に、20時の段階で一日の全ての仕事を終えることができた。これから就寝までの時間を使って、作曲実践に打ち込み、昨夜作った曲をもう一度聴き直したい。修正を施し、曲の分量を増やすことができれば、もう少し量を増やす。できれば、明日か明後日にこの作品をとりあえず公開しておきたいと思う。すでに自分の頭の中には、試したい作曲技法がいくつもあるため、それら一つ一つを意識的に活用し、一つ一つ新しい曲を作っていきたい。

---

とにかく、長い曲を作るのではなく、構造的にシンプルかつ、短めの曲を無数に作っていく。演奏者のための練習曲ではなく、作曲家としての自分のための練習曲をおびたしい数にわたって作っていく。

一つ一つの技法を試すように、一つ一つの装飾表現を試すように、一曲一曲作っていく。実際に曲を作りながら、音楽理論と作曲理論の理解を深めていく。そうした実践に絶えず従事し、曲を作れば作るほど、徐々に様々なことが見えてくるだろう。それこそがまさに、音楽理論と作曲理論の真なる理解につながり、作曲技術の涵養につながるだろう。2017/10/13(金) 19:59

#### No.290: Healing and Transformation

I have recently kept a dream diary as long as I remember a dream. It is beneficial shadow work for me. I recognize that keeping a dream diary heals my psyche in a unique and substantial way.

This shadow work not only heals my psyche but also transforms it. Once I shed light on my shadow and express it with a certain form, it comes back underneath my psyche again but fully supports my unconsciousness this time.

I also notice that music composition includes the same effect. I experienced a catharsis yesterday by composing music. The catharsis was emotional, somatic, cognitive, and spiritual. Everything related with my psyche was catharized in the process of music composition.

After the catharsis, my inner world became slightly different. That was healing and transformation. Transformation happens after healing, and healing occurs after transformation. Every experience to compose a small piece of music will endow me with healing and transformation. 07:52, Saturday, 10/14/2017

#### 1646. 身体的・超越的投影執筆

ふと視線を書斎の窓の外にやると、辺りはもう真っ暗闇に包まれていた。金曜日の夜八時。この時間には、もう辺りは真っ暗である。今日は天気にも恵まれた金曜日だった。そうした天候を尻目に、今

---

日は一日中、「実証的教育学」のコースで課せられている最終論文の執筆に取り組んでいた。ほぼ計画通り、論文を執筆することができた。

一日をかけて文章を書き続けた甲斐がある。この論文を書き始める前に、すでに自分の中には論文の全体像があったため、その全体像の構成を大雑把に列挙しただけで、文章を執筆する私の手が自然と動いていった。

言語が日本語であろうが、英語であろうが、もはや全く相違はない。むしろ学術論文に関しては、日本語ではそれを行う訓練を受けていないため、英語で論文を執筆する方がはるかに容易である。論文の全体像があれば、まさに上から何か降ってくるかのような形で、文書を書くような自分がいる。その点は、日本語の日記や書籍の執筆、英語の日記や論文の執筆において、全く相違がない。

何か文章を書くときに、いつも自分の内側には書くべきことの塊がある。それは内側にあると表現したが、感覚としては身体の中心部にあるのと同時に、それは身体を離れ、意識空間の遙か彼方に存在している感覚だ。そうであるから、自分の身体の芯から文章を生み出す感覚と同時に、遙か頭上にあるものを下ろしてくる感覚があるのだろう。自分の執筆方法は、身体の中心部からの投影であり、自己を超越した場所からの投影であると言っていい。

今、このように文章を書きながら思ったが、より正確には、自己を超越したものからの投影が先であり、それを具現化させるために身体の芯から文章を形として表現していると言える。今日は、英語の論文に関しては2,000字ほどの執筆量となった。今回の執筆対象領域が、自分のこれまでの専門性とは異ったものであったことを考えると、専門領域であれば、より文章を執筆していけるのではないかと思う。

理論的な論文か実証的な論文かによってまた異なってくるだろうが、今自分が想定している専門領域の知識と技術をより磨いていけば、やはり二、三日で一つの論文のドラフトを完成させることは十分に可能だという感触がある。おそらく、この感触を持っている自分はこの瞬間の自分に他ならないが、それは数年先の自分の実体験の先取りのように思えて仕方ない。数年後、今自分が考えている四つの科学領域の専門性を高めていけば、そうした形で論文を執筆していくことが十分に可能になるだろう。

---

そうした意味において、これからの数年間はとても大事な時期になりそうだ。来年に所属する予定の米国の大学院に無事に辿り着くことができれば、もう自分は最後の日まで学術探究に邁進し続けることが必ずできていると思っている。2017/10/13(金)20:19

#### No.291: 20 Years Ago and 50 Years Later

I finished the first draft of the paper for the assignment of a course in this semester. My initial plan was to complete it within two days. As I planned, I completed it in the last two days. I did not pay attention to the entire word count, but the total amount of words would reach 5,000. I thought that I could write up the draft of an academic paper in the field of my expertise for a couple of days.

While having supper, I was recalling my memories when I was a junior high school student. I vividly remember the first time I wrote an English sentence. Probably, the approximate amount of the words of the sentence would be five. It was almost twenty years ago.

Today, I wrote 2,500 words. In those days, I could not believe that I would be able to write a paper with 5,000 words within two days. This is the crux of human development, isn't it?

I composed a small piece of music with only 16 measures yesterday. How many measures can I compose 20 years later? What do the quality and quantity of my writing and composing 50 years later look like? I am completely enthralled by my imagination to envisage the moment 50 years later. 20:05, Saturday, 10/14/2017

#### 1647. 絶え間ない創造活動の中で

起床直後、心身ともに自分の調子が極めて優れていることに気づく。その充実ぶりは自分でも驚くばかりである。

今朝は六時前に起床し、六時を少し過ぎたあたりから今日の仕事を開始した。何かを創造していく活動を全て自らの仕事だと見なしているが、果たしてそれを日本語の「仕事」という言葉で表現して

---

良いものか定かではない。その語彙に内包される語感と自分が内側で感じていることとの間には、大きな溝がある。

今朝の心身の状態が極めて良好な理由の一つに、昨日も絶えず文章を書くことの歓喜の中にいた、ということが挙げられるだろう。昨日執筆していた論文は、「実証的教育学」の最終課題に関するものだが、それが課題だという意識はなく、文章を執筆する素晴らしい機会を提供してくれる媒介物だ、という意識の方が強い。仮にこれが課題ではなく、自分の研究主題に対する執筆であったのであれば、その歓喜の度合いは果てしないものになっていただろう。

昨夜書き留めていたように、突き抜けた歓喜の中で学术论文を絶えず執筆し続ける日はもうすぐ来る。それは必ずやって来る。

昨日、グレン・グールドのアルバムCDを25枚ほどダウンロードした。正確には、Spotifyを経由して、それらのCDを自分のアルバムの中に保存した。昨日は絶えずグールドの演奏を聴いており、とりわけバッハの楽曲に対する演奏を延々と繰り返し聴いていた。今日も午前中はバッハの曲を中心に、グールドの演奏を聴きながら仕事を進めていく。

午後からは、昨日ダウンロードした他のアルバム曲を聴いていきたいと思う。昨日改めて驚いたのは、グールドが尋常ではないほどにCD曲を残していることだった。バッハを中心に、同じ作曲家の同じ曲を何度も演奏し、それをCDにしている。それらの制作年は異なり、CDごとに演奏の音色も当然異なる。

グールドも間違いなく傑出した表現者であり、彼はピアノ演奏を通じて「創る人」であったのだと思う。グールドにとっては、演奏に次ぐ演奏が、創造に次ぐ創造と等しかったのだろう。私がグールドの演奏に惹かれるものを感じているのは、彼が創ることを強く意識していた表現者だったからだろう。

今朝の心身の状態が極めて良好な別の理由は、昨日からいよいよ、自分の曲を自らの手で作り始めたことにあるかもしれない。論文を通じて文章を創造する喜びならず、作曲を通じて曲を創造する喜びは、何と形容していいのかわからない。それぐらいに、曲を生み出すという創造行為には特殊な意味と力が内包されている。昨夜、結局全ての仕事を終えたのは夜の九時頃であったが、そこから一曲ほど短めの曲を作った。

---

---

作曲の熟達者から見れば、その曲は何の変哲もないものだろう。そして、作曲理論と作曲技術の未熟さが露呈しているものだろう。だが、そうだとすると、一つの曲を作る過程で得られるあの高揚感や、自分の内的現象が曲の形になるという無常の喜びを私が感じていたことを偽ることはできない。

とりあえず形となった自分の曲を何度も繰り返し聴いてしまう自分がその場にいた。そして、就寝前にかけて、自分でその曲のメロディーを何度もつぶやいていたのである。自然言語を通じた表現活動のみならず、音楽言語を通じた表現活動が自己にもたらす影響というのは、筆舌に尽くしがたい。

両者の創造行為の持つ性質について、両者の実践を通じながら、さらに自分の考えを深めていきたいと思う。昨日は、とにかく充実した一日だった。今日も明日もそうした日になるだろう。2017/10/14(土)06:34

#### No.292: Astonishment and Awe

I woke up late today. It was almost 8 o'clock. Although today's beginning was late, I was fortunate to see a clear blue sky in the morning.

I often see a dark sky when I wake up. Today is a little bit different. Birds are singing on twigs of a tree. While watching the birds, I contemplated the mystery of all manifestations in this reality. One creates many, and many goes to one. The truth makes me astonished and awed.

09:01, Sunday, 10/15/2017

#### 1648. 夢日記と作曲がもたらす治癒と変容

昨夜就寝前に、夢を振り返るという行為と曲を作るという行為が、自分の精神の治癒と変容に多大な役割を果たしていることに気づいた。夢を振り返り、それを言葉で記述していくという行為は、極めて有益なシャドーワークであると思う。

今から六年前、私が米国のジョン・エフ・ケネディ大学に在籍していた頃、最も仲の良かった友人にジョナサンという男がいる。彼は、夢と意識を専門としており、彼の勧めもあり、いつしか私は夢日記をつけるようになっていた。当時は、夢について言葉を当てるのではなく、全て絵画として表現して



---

いた。時折、英語でコメントを付したりしていたが、できる限り絵の形で夢を記録していくことを行っていた。今は、日本語で文章を書くことを自己に許容したこともあり、見た夢について日本語で書き留めることができている。夢を絵画として表現することにも大きな効果があったが、文章で夢を書き留めておくことも、絵画に勝るとも劣らないほどの力を持っていることを日々感じる。

基本的に私たちは、自分のシャドーと一人ではうまく向き合うことはできない。そもそも対象となるシャドーを捉えることが極めて難しいからだ。だが、夢というのはまさにシャドーの顕現に他ならず、それと自分なりに向き合っていくことは、優れたシャドーワークのように思える。

覚えている限りの夢、そして書ける範囲の夢については、できるだけ書き留めるような習慣が始まってからしばらく経つ。私は時に、夢を記録した数々の日記に救われた思いになることがある。

夢の中には治癒と変容をもたらす何か秘められている。夢の持つ治癒と変容作用が、私の日々の活動を陰で支えている。

やはりシャドーとは、ひとたび認識の光に照らされ、それが形として外側に表現された時、今度は私たちの陰で私たちを支える存在になるのだ。作曲についても、同様の治癒と変容作用がそこにあることに気づく。

昨夜、一つの曲を作っている最中に、何か浄化されていくような感覚があった。内側の言葉にならないものを音楽として形にしていく作業を通じて、これまで自然言語では通ることのできなかつた道から何か外に出た感覚があった。そこには治癒の根幹原理のようなものが見える。

ある内側の内的現象が、あるべき場所を通過して、あるべき場所に向かっていく。それを経た後の自分の内側の世界は、これまでの世界とはまた少し異なるものになっていた。それが治癒であり、治癒からの変容である。作曲の実践を始めてまだ日が浅いが、これから作曲実践を通じて、曲を創造するという行為が持つ、精神の治癒と変容作用を何度も経験することになるだろう。

そうした恩恵に与りながら、治癒と変容をもたらす作曲行為について、より考察を深めていきたいと思う。文書を書き続けることにせよ、曲を作り続けることにせよ、なぜ自分が自然とそれらの行為に

---

向かっているのかがわかったような気がする。それらの行為には、人を癒し、人を発達させていく内在的な力があるようなのだ。2017/10/14(土)07:31

#### No.293: Strenuous and Continuous Practice

It's Sunday today. I will spend leisurely time today. After I finish some work, I plan to engage in music composition. I came up with various ideas to compose music yesterday. I want to experiment the ideas in actual practice. It would be a key for me to do as many experiments as possible in order to sophisticate my composition skills.

I do not care how short my music is and how many it includes mistakes. The gist is to continue to compose music through a tremendous amount of experiments. Strenuous and continuous practice is the essential aspect of my being. 09:11, Sunday, 10/15/2017

#### 1649. 中学生の頃

気が付けば夜が訪れ、辺りは真っ暗闇に包まれていた。今日も昨日に引き続き、書きに書く一日だった。具体的に何を書いていたかという、「実証的教育学」で課せられている最終論文だった。一昨日に計画していたように、昨日と今日をかけて5,000字ほどのドラフトを完成させることができた。

昨日の書き始めの前に、全体の構成を練っており、それが間接的スキヤフオールディングの役割を果たしてくれたことを差し引かなければならないが、本当に二日あれば、今後自分の専門領域に関する一つの論文のドラフトを完成させることができるという実感がある。

昨年書き上げた修士論文に関して、私は規定の分量一杯の10,000字ほどの論文を書いた。今後、自分の専門知識がより拡張され、専門領域における研究手法の技量が高まれば、10,000字ほどの論文であったとしても、それほど日数をかけることなくドラフトの第一稿を完成させることができるだろう。もちろん、それは単なるドラフトであるから、そこから論文を寝かせ、さらに洗練させていく作業が必要となるのは言うまでもない。ただし、論文を執筆する力は着実に身につけていると感じる。

---

先ほど夕食を摂りながら、ふと中学生時代にお世話になっていた英語の先生のことを思い出した。当時の自分は、どのような英作文を書いていたであろうか、ということを出していたのだ。当時の自分の英作文を思い出してみると、大変微笑ましい。おそらく、中学一年時においては、一行ほどの英文しか書けなかったように思う。そこから徐々に英語の力を付け、数行ほどの英作文をかけるようになっていった。

今、オランダのフローニンゲン大学では、応用数学を活用した研究に従事しているが、中学生時代の私は抽象的な思考能力の発育が遅れており、数学はあまり好きではなかった。小学生時代に引き続き、数学の文章問題の意味がよくわからないという時期を長く過ごした。奇妙なことに、数学的な思考能力がなくても、数学の試験や成績に関して困ることはなかった。

数学に比べて、英語は好きでもあり、得意でもあった。特に、英作文を書くことに関しては、今から振り返ってみても、特殊な嗜好性を持っていたように思う。あの時からやはり、自分の内側から自分の言葉で文章を構築していくことの充実感を味わっていたのだと思う。その充実感は消えることなく、今の自分に確かに受け継がれている。初めて100字の英作文をかけた時の思い出が、フローニンゲンの暗闇の中に輝いているように思えた。2017/10/14(土) 19:50

#### No.294: My Lexical System

I am used to academic writing in English, but I notice that I have still some difficulty in other writing genres. For instance, it is often laborious to keep a dream diary in English. Interestingly enough, it is much easier for me to write academic papers in English than I do in Japanese, yet keeping a dream diary is opposite.

One plausible reason is that my lexical system of English academic language is more robust than that of Japanese. On the other hand, my English vocabulary networks in other genres might be thin. That may be why I feel some difficulty in keeping a dream diary in English. I intend to cultivate my undeveloped lexical networks to describe my inner world in a more rigorous and meticulous way. 09:43, Sunday, 10/15/2017

---

## 1650. 創造から始まり、創造に還る

この二日間で5,000字ほどの論文を執筆したことに並行して、英文日記と日本語での日記が止まることはなかった。止まるというもむしろ、文章の淀みない流れが自分を取り巻いていた。

今日、グレン・グールドが演奏するバッハの楽曲を聴いている最中、バッハの音楽が白色と黄色が混じった音を立てながら、自分の頭の中を走る感覚があった。思考と自己が音になった瞬間だった。その感覚から戻ってきた時、また自分は論文を書き続けていた。

止まることを知らない淀みなき流れ。それはもう、自分の外側を流れていない。それは確かに自分の内側を流れており、自己はその流れに他ならない。文章執筆に関する、この淀みなき流れと合一を果たすことができたらどれほどいいだろうか、と欧州での生活を始めてから願わなかった日は一日たりともない。

もうそのようなことを願う必要などないのかもしれない。ここから願うことは、文章創造の流れとして残りの一生を全うすることだ。創造の流れの中で生きるのでは決してない。流れとして生きるのだ。

この二日間の感覚を冷静に観察してみると、それは創造の源泉につながっている感覚だと言える。自分の肉体的身体の遥か彼方にある創造を司る源泉を知覚することができる。それは当然、肉体的な眼で見ることはできないが、心眼において十分に知覚可能である。あたかも、身体でその源泉に触れている感覚がある。

その色、形、質感の全ては、自分を取り巻く全ての存在の動的な変化に応じて千変万化する。それに触れているという感覚、いや、その源泉から一時も離れることがない感覚の中でこの二日間を過ごしていた。

正直なところ、まだ全くもって書き足りない。創造の源泉に繋がると、このような状態を引き起こすらしい。それでは、創造の源泉と自己が一体となった場合、自己はどれほどの創造行為を行うことが可能になるのだろうか。肉体的身体を取り巻く空気と同じように、創造の源泉が自己を取り巻く段階から、次は創造の源泉との完全なる合一を果たす段階がやってくるだろう。それが成された時、創

---

造として生き、創造として人生を終えることができるように思える。人間は創造から始まり、創造に還るのではないだろうか。2017/10/14(土)20:20

### No.295: Music Journals

Like writing a journal everyday, I want my composition works to be “music journals.” I intend to write a music journal that is a small piece of music work. Each one of the pieces should be based on my daily thoughts and experience.

I will inspire my conceptual, somatic, existential, and spiritual themes as a form of music. I do not have to stand ready for creating music. What I need to do is just compose a piece of music as like I keep a journal everyday. 17:06, Sunday, 10/15/2017

#### 1651. この顕現世界のドラマ

今朝の目覚めはとても遅く、起床してみると、辺りはもう随分と明るくなっていた。いつもは闇に包まれた真っ黒な朝しか見ることができないのだが、今日は薄青く光る朝の景色から一日がスタートした。

起床した時刻は朝の八時に近かった。ここ数日間、論文の執筆に精を出しており、予定通り文章を書き終えた後に、さらに作曲実践を行っていたため、自然と就寝時間がいつもより少し後ろ倒しになっていた。そうしたことが影響をして、今朝のように起床時間が遅くなってしまったのかもしれない。よくよく考え てみると、こうしたことは今朝に限ったことではなく、これまでも何度もあったように思う。

創作活動というのは、その本質に没頭体験を持っており、その体験にひとたび捕まると、もはやその体験の外に出るのが非常に困難である。昨日も実際にそのような感覚であった。

今日は日曜日ということもあり、比較的ゆったりとした時間を過ごしたい。ふと書斎の窓の外に目をやると、小鳥の群れが目の前の木々に止まった。気づけば、目の前の木々は葉を失い、裸になっていた。裸になった木々の枝に、10羽近い小鳥の群れが止まって休んでいる。

---

鳴き声を発する者、静かに止まっている者、枝から枝に元気良く飛び移っている者、一羽一羽の行動に個性がある。そういえば、ここ数日間、小鳥の群れたちが自宅の家の屋根の方に向かって飛び、屋根の方から下に降りてくる光景を目にするようになった。もしかすると、小鳥たちは巣を作っているのかもしれない。今はもしかすると、これから暖かい地域に向かって飛び立っていくための準備の期間であるかのようにも思う。

書斎の窓の本当に近くまで鳥たちが近寄ってくることもある。数日前には、窓にぶつかることもあった。鳥たちの様子を観察してみると、口に餌をくわえている者が何羽かいた。それを巣に持ち帰る者がいた。やはり、この時期に栄養を確保し、これから南下するための準備をしているようだ。

彼らはきっと渡り鳥なのだろう。おそらく、昨日に見た自己組織化の例にあるような隊列を組んだ飛行も、南下に向けた訓練なのかもしれない。

風が止んでいる。目の前で動いているのは、鳥たちが休む小枝の揺れぐらいだ。

一者から多者が生まれ、多者が一者になるということの意味が、このところよくわかるようになってきた。

よくよく、さらによくよく考えてみると、目の前の木々に休まる個性を持った鳥たちがこの世界に存在していることは、驚愕に値することであり、とても大きな畏怖をもたらす。それは鳥たちのみならず、木々の向こうに見える赤レンガの家々についても同じであり、それらの木々にしても同じことだ。

この顕現世界はおそらく、絶え間なく動くドラマを全ての存在に提示し続けている。そして、そのドラマには全ての存在が必要なのだと思う。2017/10/15(日)08:23

#### No.296: Pictorial Music

I thought that I would make my music works not only musical but also pictorial. Each piece of music can be picturesque. A musical score is a canvas, notes and musical symbols are pigments. I will compose music like I draw a picture.

---

I am sometimes struck with the beauty of musical scores when I see great composers' works. They created not only beautiful music but also decorative paintings. It is possible to compose music as music per se and paintings. 07:17, Monday, 10/16/2017

## 1652. あの頃のように

ここ数日間は天候に恵まれ、来週の水曜日までは晴れの日が続くようだ。今日は遅く始まった日曜日であるが、きっと充実した一日になるだろう。

今日はいつもよりゆったりとした形で過ごしたいと思う。とは言え、明日の「学習理論と教授法」のクラスで行う予定のプレゼンに向けた資料作りと発表の準備がある。そして、午後からは一件ほど、日本企業との協働プロジェクトのオンラインミーティングがある。

プレゼンに関しては、20分程度のものであり、時間としてはそれほど長くない。今回のプレゼンは、グループで協働執筆した論文を基にしたものだ。数日前に、自分が執筆した論文の箇所についてはスライドを作成しており、その他の部分については、グループの他の三人にそれぞれの担当箇所のスライドを作成してもらうように依頼をしていた。

三人とも早々にスライドを作成してくれたようであり、今日は午前中にスライドを完成させ、夕方にプレゼンの練習を何度か行いたい。日曜日である今日をゆったりと過ごすというのは、大量の論文を書くことなく過ごすという意味である。また、できれば今日の仕事を早めに仕上げ、作曲実践に時間を多く充てたいと思う。

昨夜も一時間ほど曲作りに熱中していた。曲を作る過程の中で、自分がこれまで英文執筆の力量を高めていったのと同じプロセスを経て、作曲の技術を磨いていくことになるだろうと思った。昨日振り返っていたように、初めて英文を書いた日の時を思い出すことが大切になる。そこから自分がどのようにして、今に至ったかを改めて考えてみるのが大切だ。

最初は10文字の一行でもいい。その一行を毎日書けるかどうか、一行書くのと書かないのとの違い。その違いはその瞬間においては極めて小さいが、後々になって大きな差を生み出す。そして、毎日短い文章を積み上げていった結果、それは巨大な構築物となって現れる。偉大な創造者は全

---

て、このプロセスを辿っている。誰一人として、一夜にて巨大な構築物を生み出していないのだ。その背後には、必ず日々の絶え間ない鍛錬があり、継続的な創作活動がある。

昨夜創作に打ち込んでいた曲も、極めて短いものだった。作曲を終え、ベッドの上で横たわっている時に、曲の作り方についてあれこれとアイデアが浮かんでいた。それを早く試してみたいという気持ちがふつふつと湧き上がっていた。とにかくいかに多くの実験を行うかが、今の私がいる段階においてなすべきことだろう。

オンラインの作曲講座で学んだ一つ一つの技術を意図的に活用し、実験的な形で曲を生み出していく。おそらくこれをしばらく続けていくことになるだろう。その後、少しずつ過去の偉大な作曲家の曲をもとに曲を生み出していく段階になるはずだ。もちろん、現段階においても、時折過去の作曲家の楽譜を眺めることがある。ただし、本格的に彼らの作品をもとに自分なりの曲を生み出していくのはもう少し先だろう。今は、基本的な技術の精度を高めるために、それらを実践の中で活用していくことが何よりも大切である。

今日も短めの曲を作る中で、一つ一つの技術を意図的に活用したい。英作文を初めて書いた時のように、短い曲を書いていく。どれほど短くても構わないし、どれだけミスがあっても構わない。とにかく自分の手で書き、それを形に残していくことを継続させることが何よりも重要だ。

あの頃のように、小さく始め、それを愚直に継続させていくこと。愚直な継続は、自分の中に宿る本質の一つかもしれない。2017/10/15(日)08:47

#### No.297: Learning as Intellectual Pastimes

At last, I finished today's work. It is already past nine o'clock. Today was very dense in a positive sense. I participated in three classes, made my presentation in one class, and wrote a paper and programming codes.

Everything could be categorized in learning or it could be regarded as intellectual recreations.

Learning is always fun for me. Probably, I am addicted to learning. I cannot judge it about whether it is healthy or not, but it is definitely intrinsic.



---

Tomorrow will be also a day as an intellectual pastime. The term “pastime” is a perfect word to describe the state of my consciousness during learning that I am absorbed in time to know afterwards that time existed and passed by unknowingly. 21:31, Monday, 10/16/2017

### 1653. 絵画的な音楽

先ほど、自分が作った曲を聴き直していた。やはり所々に気になる箇所があり、オンライン講座で習った作曲のルールいくつかを違反している箇所が散見される。そのオンライン講座では、モーツァルト時代のクラシック音楽のような曲の作り方を教えており、その時代の曲の制作方法には厳格なルールがいくつもあるようだ。そうしたことを踏まえてみても、私が作った曲は全くもってクラシック音楽のようではない。

昨夜も少しばかり考えていたのは、文法的な誤りをどのように解釈するかという問題である。文法というのも、もちろん不変な部分もありながら、時代の変遷に応じて変化する部分もあると思うのだ。それは音楽言語のみならず、自然言語の文法にも当然見受けられる。そして文法以上に、語彙の意味は時代の変遷に大きな影響を受ける。そうしたことを踏まえながら、どれほどまでに既存の文法に忠実になるかという線の引きどころを考えていた。言い換えると、文法に忠実になる部分をどれだけ残し、意図的に文法から乖離する部分をどれだけ設けていくかの線引きを考えていたのが、昨夜の就寝前のことである。

現段階では、意図的に文法から逸脱するというよりも、自分の無知さと技術の不足から自然と文法から離れているということが起こっているだろう。今後は、既存の文法構造と語彙の意味に習熟し、そこからどれだけ忠実にそれらを守ることと意図的に逸脱することの均衡点をどこに設置するかを見出していくことになるだろう。

また、自分の作った曲の楽譜を見ながら、曲を音としてだけではなく、絵画として創作することも可能なのではないかと思った。つまり、一枚の楽譜をキャンバスに見立て、一つ一つの音符や装飾記号などを絵の具と見立てるのである。それらを用いて、一つの楽曲が完成した時、その楽譜は一枚の絵画作品であると言ってもいいのではないかと思う。

---

今、手元には、過去の偉大な作曲家の楽譜が多数ある。それらを眺めていると、やはりどの楽譜も音楽的な美しさのみならず、絵画的な美しさもあるようなのだ。聴覚的かつ視覚的な美を、作曲を通じて意図的に生み出すことは、もっとずっと後になってから取り組むことだと思うが、今この時点においても、そのようなことを行っていきたいという思いがすでに芽生えている。

一つの曲が、音楽的かつ絵画的な意味を持ち、それが精神の治癒や変容につながれば、非常に価値のあることだと思う。先ほど、私は自分が作った曲を聴きながら、それらに励まされているような感覚があった。それはどこか、自分で執筆した日記に自分が励まされることがあるのと似ている。自らの表現物は、絶えず自己にフィードバックをしてくるような作用を持っている気がしてならない。

一つの表現物を生み出すことは、そのまま再び自己にそれが流入することを意味する。出力と入力とは分離したものではなく、常に一体となったものであり、相互フィードバックを行っている。

自己の成熟において、自己産出というのは不可欠な要素であり、自己産出を促進する試みの一つとして、自己の表現物を形として残しておくことが挙げられるだろう。今日もこの絶え間ない自己産出の流れの中で、自己の表現物を形として残しておきたい。それが明日の自分になるのだから。

2017/10/15(日)11:04

#### No.298: Dream Last Night

I got up before five today. I started today's work past five. The end of my dream last night woke me up, whose theme was intense. The feeling still remains within me, which tells me that the dream had a positive meaning. The dream casted an intense impression on me, but I cannot remember the contents of the dream. The intensity of a dream does not necessarily connect with how much I remember the dream. 06:15, Tuesday, 10/17/2017

#### 1654. 待つ夢・探す夢

今日からまた新しい週が始まる。気づけば早いもので、フローニンゲン大学での二年目のプログラムの最初のクォーターも今週と来週だけとなる。二つの論文課題も最初のドラフトが出来上がって

---

いるため、ここからは追加・修正を施す作業だけとなる。そして、今日を含め、執筆した論文に対して二回ほどプレゼンを行えば、あとは最終試験を受け、最初のクォーターを終えていくことになる。

よくよく考えてみると、論文執筆、プレゼン、そして筆記試験を課すというのは、なかなかハードな構成になっているように思う。だが、それらはいずれも、学習項目を書き、話すという実践の場であり、それらのおかげで、知識項目が確かに身になっていくという実感がある。ここからの四週間は、論文の修正とプレゼンや最終試験に向けての準備に力を入れていくことになるだろう。

昨夜は夢の中で、地元の海の海岸沿いを歩いていた。晴れ渡る空、そして太陽の光の強さから察するに、季節は夏であった。

裸足で砂浜を歩きながら、私は誰かについて考えているようだった。誰かについて考えながら、私はあてもなく海岸沿いを裸足で歩いていた。その誰かが自分の元にやってきたと思い、後ろを振り返った。しかし、そこには誰もいなかった。

太陽の方を見上げると、日差しの強い太陽光が自分を射していた。ずっと遠くのあの場所まで行ったら引き返そうと私は思った。

海岸を端から端まで歩こうという意思。その意思が芽生えた瞬間に、夢の場面が変わった。

次の場面では、大学病院の近くのホテルに宿泊しているようだった。厳密には、私は宿泊客ではなく、先ほどの海岸で待っていた人物をホテルに探しに来たようだった。

地下一階から、ホテルの中腹の階にエレベーターで上がっていった。あてもなくその階を歩き、その人物を探そうとしていたのである。どの部屋もドアが開いており、中の様子が廊下から見える。昼にもかかわらず、不思議と宿泊客たちのほとんどが自室におり、テレビを見たり、他に何をするでもなく、くつろいでいる。

結局、この階にその人物はいなかった。そのため、やって来たエレベーターに戻ろうとした時、偶然知人らしき人物を見かけた。その友人とはここ10年ぐらい会っていなかったから、懐かしくなって思わず声をかけた。すると、その男性は不審な顔を浮かべていた。不審な顔を浮かべながら、その男

---

性はエレベーターの中に入っていき、私は名前を呼びかけ続けながら、彼の後を追ってエレベーターの中に入った。すると、人違いであることに気づいた。

その男性は、とても気持ち悪がっており、エレベーターからすかさず降りて、エレベーターの中には私だけとなった。結局私は、人違いに加え、海岸で待っていた人物を見つけることはできなかった。

一階までエレベーターで降りると、ドアが開いたと同時に、エレベーター脇で四人の男性が何かを話していた。一人は白衣を着ており、医者であることがすぐにわかった。彼らは大学病院と本体の大学との関係についてなにやら話しているようだった。関係者ではない私には、あまりその話を理解することができなかったが、彼らの話を最後まで聞いていた。

四人のうち、三人は医者ではないようだった。話が終わると、三人は一緒になってどこかに向かって歩き出したが、白衣を着た医者はエレベーターに向かってきた。お互いの視線が合い、その場で私たちは会釈をした。そのホテルを離れ、私は大学病院に向かって歩きだした。そこに行かなければならない理由があったようなのだ。2017/10/16(月)07:03

#### No.299: The Sound of a Bell

The day before yesterday, I heard the sound of a bell. It came from somewhere near my house. The sound was different from that of a temple bell in Japan. What I heard in the morning on that day made me realize that I am in Europe and in the Netherlands, not in Japan.

After I had been listening to it for a while, I noticed that only the sound existed at that moment. In other words, only the sound of a bell was the world itself at that moment.

The continuity of the sound was inducing my self to converge in the sound. The self became one with the sound at a certain moment. That is why what existed at that moment was only the sound of a bell. 06:29, Tuesday, 10/17/2017

今朝は、目覚める直前まで見ていた夢の強い印象によって起きる形となった。夢の中での感覚が起床直後にも残っており、その感覚がとても肯定的な意味を持つような夢であったことを告げている。だが、その内容については覚えていない。どうやら、夢の印象が強いことと、その内容を覚えているかどうかとは直接結びつかないようだ。

一昨日の午前中、どこからともなく鐘の音が聞こえた。街の中心にあるマルティーニ塔の鐘の音がここまで聞こえたのだろうか。あるいは、自宅からより近くにある教会の鐘の音だったのかもしれない。日本の除夜の鐘とはまた違う響きを持つ音が、自分の耳に届けられた。

今の私がいる場所は日本ではなく、ヨーロッパなのであり、オランダなのだということが音から実感するような体験であった。鐘の音にしばらく耳を澄ませていると、そこには鐘の音しかなかった。別の表現をすれば、鐘の音だけがそこにあった。鐘の音に合わせて、自己が鐘の音に向かって収束していく。そこで自己と鐘の音とが一つになる瞬間があった。だからそこにあったのは、鐘の音だけであった。

以前に見た夢の日記を読み返していると、それがきっかけとなり、少し前の夢の断片を思い出した。それは高速道路を車で走る夢だった。実際には、運転をしていたのは別の人物であり、私は助手席にいた。しばらくすると、運転手が運転を変わって欲しいと申し出た。

普段車の運転をする機会のない私は、運転が不慣れである。そうした懸念の中、しぶしぶ運転を変えることにした。そこは高速道路であるために、他の車はかなりのスピードを出している。しかし私は、スピードを出すことなく、できる限りゆっくり走ることを心がけていた。

時折私は、“Slower is better. It’s better for our learning and development. That is what Jean-Jacques Rousseau pointed out.”という独り言をつぶやくことがある。昨夜も就寝前に一度ほどその文言をつぶやいていた。「ゆっくりな方がいい。私たちの学習や発達においては、ゆっくりな方がいいのだ」ということを何かの拍子にふとつぶやく自分がある。

---

高速道路を作ったのは誰であり、高速道路の意味を付与したのは誰だろうか。そして、その意味は時代のどのような要請からやってきたのだろうか。高速道路の作り手、そこへ意味を付与した者、高速道路が生まれた背景にある時代の精神は言わずもがなである。それらを知っているから、自分は夢の中で高速道路をゆっくりと走ることを選択したのだと思う。

高速道路を速く走りすぎることも、遅く走りすぎることも違反であるというのは、とても皮肉なことだと思う。その夢を思い出しながら、それでも私は、できる限りゆっくりと自分の道を進みたいという思いを新たにした。2017/10/17(火)05:38

### No.300: Highway and My Way

I was reading my dream journal yesterday, which prompted me to remember a fragment of a dream a few days ago. I was on a highway. I was not driving a car, but I was just sitting on the front seat. Since it was a highway, the speed of every car was quite fast. At a certain moment, the driver asked me to drive the car. I accepted his offer grudgingly. Although every driver was driving fast, I tried to drive as slowly as possible.

I often talk to myself: “Slower is better. It’s better for our learning and development. That is what Jean-Jacques Rousseau pointed out.” The monologue occurred yesterday, too.

Who constructed the highway? Who constructed the meaning of the highway? Others did. What exists behind the meaning of the highway? An ideology exists.

I chose to drive slowly because I had my will to confront these constructions built by others and the society. It is ironic for us that driving too fast and too slow on a highway is a violation of the law. Nevertheless, my volition encourages me to walk my own path as slowly as possible. 06:58, Tuesday, 10/17/2017

### 1656. 景観へのくつろぎ

今朝はいつもより少し早く、五時前に起床した。心身の様子を観察してみると、十時に就寝すれば、この時間帯に起床しても何の問題もないのではないかと思う。

---

---

昨日は、不思議なほどに暖かい日であった。マフラーを巻く必要などなく、上に羽織るものも先日から使い始めた冬用のコートではなく、秋用のジャケットに戻した。

昨日の朝一番には、自宅から少し離れた場所にあるキャンパスで講義があり、そこに向かっている最中のフローニンゲンの朝の気候と景色は格別であった。自己が気候と景色の中にくつろいでいる確かな感覚があった。気候や景色の外に自分がいるのではなく、気候や景色と自己が切り離されているのでもなく、気候や景色の中に自分が存在していて、なおかつそれらと自己が一体となっている感覚があった。

フローニンゲンの街に張り巡らされた運河の上に、朝日が照らされている姿を目撃した時、そうした感覚は一層強さを増した。道行く人たち、通りかかった秋模様の公園などを含め、景観全体の中に自己がくつろいでいた。気がつくと、私は目的地に到着した。すると偶然、キャンパスの門の前で、今年の研究のアドバイザーを務めてもらう予定のミヒヤエル・ツシヨル教授と出会った。

前日に、ツシヨル教授から、その日の講義がどこで行われるのかを教えて欲しいと私に連絡があった。ツシヨル教授は、米国の大学での六年間の生活を終え、今年の九月からフローニンゲン大学にやってきた。そのため、学内の土地勘がまだないそうなのだ。

先日、ツシヨル教授と学内のカフェテリアで話をして以降、お互いの研究テーマにおいて重なる部分が多く、意気投合することができた。そうした間柄だということもあり、クラスを私に尋ねてきたのだと思う。ツシヨル教授は自転車に乗って門の前に姿を現した。大学教授が自転車に乗って通学してくる様子はとても微笑ましい。

フローニンゲンは、世界でも有数の自転車利用率を誇る街だ。そうしたこともあり、この街では、大学教授であっても自転車を使って通学する方が多い。昨年お世話になっていた、サスキア・クネン教授も、晴れの日には自転車に乗って大学に来るということを話していた。

午前のクラスが終わり、教育学科のあるキャンパスにゆっくりと歩いて移動した。その際にも、自分を取り巻く景観が輝いており、私は輝きの中にいた。ヨーロッパという場所、オランダという国、フローニンゲンという街。ここに来るまでに自己の内側に堆積していたものが、大きな変容を遂げたことを知る。

---

---

この土地に自分がやってきたことの意味は、この変容体験にあるのかもしれない。そうした意味において、ヨーロッパという場所、オランダという国、フローニンゲンという街は、自分にとって掛け替えのないものである。この変容を経て、きっと次の場所がある。そのようなことを思わずにはいらなかった。2017/10/17(火)06:07

### No.301: Data Literacy and Programming Literacy

I was continuously writing programming codes in the morning today. The recent society is often called the “data society.” In fact, we are facing how to collect, analyze, and interpret data. The importance is increasing day by day.

“Data literacy” is a newly coined word. Since I am currently in the Evidence-Based Education program, I have had training about how to analyze and interpret data and how to make a decision based on data.

Even though I am in the field of social science, I often use a certain programming language. In parallel with the progress of the data driven society, many people would become gradually urged to acquire not only data literacy but also programming literacy. 19:47, Tuesday, 10/17/2017

### 1657. データリテラシーとプログラミングリテラシー

極めて密度の濃い一日が、また終わりに近づいている。今日は早朝の五時から仕事を開始し、事前に予定していた全ての仕事を納得のいく次元で完遂させることができた。

それにしても、この日々の充実感は一切何なのだろうか。毎日、そうした充実感を言葉で表現しようと思っても、それは言葉の範疇を越えている。言葉の外の世界にある何かが、日々私の内側に流入している。もしくは、そうした何かが、自分の内側から絶えず湧き上がっているとっていいだろう。

日々、表現することに最大の焦点を当てた形で専門書や論文と向き合い、実際に文章を書き残していく生活。そうした文章は、学術論文の形を取ることもあれば、日記の形式を取ることもある。形式の差異に関わらず、もはや自分は絶えず何かを書く人間になった。仮に人は自らを表現し、自らの



---

人生を記すことを宿命づけられた存在であるならば、ようやく私は一人の人間になりつつあるのだと思う。

今日は早朝から一体何をしていたのかを少し振り返っておきたい。今朝は早朝から、「評価研究の理論と手法」というコースのコンピューターラボの課題に取り組んでいた。このコースの課題のおかげで、私は随分と研究デザインの理論と介入手法の効果測定の方法を学ぶことができたように思う。とりわけ、私の研究対象は、人間の発達と学習であるため、研究において、何かしらの介入手法を導入した際の効果を測定することがよくある。また、学術研究のみならず、今まさに現在進行形で動いている日本企業との協働プロジェクトにおいても、人財育成プログラムの効果測定とその見直しというテーマは、まさに今回履修しているコースの内容と直結している。

現在履修しているプログラムの名称が、そもそも「実証的教育学」というものであるため、必然的にどのコースでも、データをいかに分析し、いかに判断をしていくかということに重きを置いたトレーニングが施されている。こうしたトレーニングを日々受けていると、その効果というものを疑いようもなく実感する。それは日々の自分の些細な思考運動の中に現れ始めている。

とりわけ今朝は、データ分析において、プログラミング言語のRを活用していた。世の中は、データの時代と言っても過言ではない状況になっており、どのようにデータと向き合い、データをどのように分析して、どのような解釈を施していくのかということは、時代が要請する新たなリテラシーの一つになるだろう。

以前までは、自然言語において、英語が一つの重要なリテラシーとして数えられていた。英語の重要性は変わることがなく、むしろその重要性はより増していると言えるだろう。一方で、自然言語において英語を十分に活用できるほどのリテラシーを獲得するだけでなく、上述のデータリテラシーと呼べるものに付随して、データを実際に分析するためのプログラミングリテラシーのようなものも、今後多くの人に要求されるリテラシーになるかもしれない。

今のところ、プログラミング言語は一部の者にしか用いられていないかもしれないが、社会科学の分野にいる私ですら、もうすでにプログラミング言語は必須のものになりつつある。このようなことを考えてみると、今私が在籍しているフローニンゲン大学では、この世界で生きていく上で必要な複数

---

のリテラシー能力の鍛錬を日々行っている気がしてならない。明日も今日と変わらず、そうした鍛錬の日となるだろう。2017/10/17(火) 19:38

No.302: This Coming Winter

The time of the twilight in Groningen has recently come earlier than before. It foretells this coming winter. I sincerely welcome this coming winter that would be as severe as that last year.

Since the person who I think I am is a different from that who was last year, I will experience this winter differently. I want to grasp a subtle difference, comparing the winter last year with that this year. The distinction is a proof of my development and cultivation. It will be also an essential foundation for the person who I will be next year. 20:25, Tuesday, 10/17/2017

1658. 確信

欧州での二年目の生活が始まり、すでに二ヶ月が経とうとしている。昨年的一年間、自分は見えないところで多くのことを内側に積み重ねていたようだ。それらが今一つ一つ、実感を伴う形で外側に見え始めていることは喜ばしい。論文を絶えず書き、日記を絶えず書き、曲を絶えず書くという、三つの創造行為に本格的に取り組むための準備が、今着実に進行しつつある。

もはや日々の自分の取り組みは、自分しか知らないことを知っている。表現行為の産物は、確かに誰かに参照されてこそ意味を持つ。しかし、私がより重要だと思っているのは、誰にも参照されることがなくても、絶えず何かを形として生み出していくことである。つまり、人が見ている見えていないにかかわらず、表現行為を止めてはならないのだ。

誰が見ているのかどうかというのは、もはや一切視界に入らない。自分だけが自分の表現行為を見守っている。まだ何も始めていないということ、そして、まだ何も始まっていないことを自分だけが知っている。今、日々何かを表現している量は大きなものではなく、量が圧倒的に不足していることを自分は知っている。それを教えてくれるのは、創造の源泉に繋がっている時のあの純真な感覚だ。あの感覚を基にすれば、今の次元とはまた違った量と質を持って表現活動に取り組むことができることを知っている。

---

今日小さく積み重ねていった一つ一つの行為が、その実現への足場を作る。その足場は、もはや不可視のものではなく、実際に身体で触れるのと同じぐらいの実感を持って知覚することができる。

フローニンゲンの街は、黄昏時の時刻が早くなった。正午を少し過ぎたあたりから、どこことなく夕方の雰囲気醸し出し始めている。

今はどこか素直に、これからやってくるあの過酷な冬を歓迎できる。去年の自分とは異なる自分がここにいる点において、これからやってくる冬は、去年のものとは必ず異なったものになるだろう。その差がどのような形で現れるのだろうか。今は、それを期待するのではなく、逆に恐れるのでもない。ただそれが現れることが間違いないであろうという確信だけがある。あるのは確信だけなのだ。

自分が日々生きていく中で、この掴みどころのない、表現を逃れていく確信はとても大切だ。自分の中には、「それがすでにそうなるであろうことを知っている」という感覚が、複数の対象について湧き上がっている。おそらく、それは本当にそうなるであろう。

昨日、夕方に大学から自宅に戻っている最中、微笑ましい光景を見かけた。近所のノーダープラントソン公園を抜けて、通りに出た時、羊の大群に出くわしたのだ。見ると、二人の羊飼いが車道いっぱい羊を引き連れてゆっくりと行進している。どこかの農場から別の農場に羊を移す最中のようなのだ。

羊の群れの先頭には、一匹の黒い犬がいた。その犬が羊をうまく誘導している。行列から離れようとする羊をうまくコントロールし、羊の大群を見事に率いているその犬の力量は立派であった。特に、その犬は、二人の羊飼いの言葉をよく理解しているようだった。二人の羊飼いの指示に対して、尋常ではない速度で意味を理解し、即座に行動に移している様子は、厳しい訓練の賜物だろう。

羊の行進の最中、車道ではバスや車がゆっくりとしか進めないような状況になっていたが、全ての人たちが、羊の行進を微笑ましく眺めていた。私もそうした一人だった。2017/10/17(火)20:13

### No.303: Learning by Both Reading and Writing

I started today's work at six o'clock in the morning. I composed music for an hour and half last night.

---

Since I have a number of riddles about music composition, a long road is ahead of me until I become able to freely create music.

Yesterday, I was exploring modulation because I did not grasp the concept and how to implement it in my music. Coincidentally, I came across Max Reger's book, "Modulation (2007)," which looked very intriguing. In addition to this book, since I found several interesting books about music composition, I purchased all of them.

It is true that the principle of "learning by doing" can be applied to music composition. I will enhance my music composition skills by doing—creating actual works. However, I cannot forget the importance of not only practice but also knowledge itself.

I think that I do not have robust knowledge networks about music composition. Therefore, I need to build such knowledge networks by learning through texts. Learning by both reading and writing is applied to my practice of music composition. 07:26, Wednesday, 10/18/2017

#### 1659. 転調と休符

今日は、早朝の六時から一日の仕事を開始させた。昨日、全ての仕事を終えた後、就寝前の一時間半の時間を使って作曲実践を行っていた。作曲に関しては、まだまだわからないことが多々あり、日本語で日記を書くように、自由自在に曲を生み出すまでには時間がかかるだろう。

昨日は、曲の中でどのように転調させるのかの方法について少し調べていた。しかし、表面的に意味を理解した程度であり、それを実際の曲の中に適用できる次元で理解しているとは言い難い。転調について色々と調べている最中に、ドイツの作曲家マックス・レーガーの "Modulation (2007)" という書籍を見つけた。この書籍と合わせて、七冊ほど作曲関係の書籍をイギリスのアマゾンに注文することにした。現在曲を作りながら作曲に関する理解と技術を深めようとしているが、やはり知識量が圧倒的に欠落していることが、自由自在な作曲を行うことを困難なものにしている。

転調に関してもそうである。そもそも転調というものが何であり、どのような理論に基づいて転調がなされ、そして、それらを曲の中でどのように適用していくのかの方法論が、まだ私の中にはない。

---

今は作品を生み出しているというよりも、曲を作りながら、自分の課題を洗い出している試みに従事していると言った方がいいだろう。昨日も曲を作りながら考えていたが、一つのテーマから別のテーマに移っていく際の移行のさせ方が難しい。例えば、八つの小節を作った後に、そこまでを一つの区切りとし、次の小節に向かっていく際の連続性をどのように確保するかが、まだよく掴めていない。

そもそも連続性を確保すべきなのかどうか、非連続的な形でも良いのかどうか、要は、違和感のない形でテーマを移動させるにはどうしたいのかを考えていた。その他にも、そもそも八つの小節で区切るのではなく、一貫したテーマの中で、連続的な音の流れをより多くの小節として表現していくにはどうしたらいいのかを考えていた。

作曲を文章執筆に喩えると、句読点のようなものが曲の中にもある。今の私は、頻繁に文章を終えるように、句読点を曲の中に打っている印象がある。過去の作曲家たちの楽譜を眺めていると、確かに一つの曲の中で句読点を何度も打っているのだが、それらによって曲の流れ、つまり連続性が妨げられることはない。

私が今作っている曲は、句読点の打ち方が良くないせいか、曲がそこで終わってしまうかのような印象を与える。文章が続いていくのではなく、文章がそこで終わってしまうかのような感覚を引き起こしてしまうのだ。句点を打ったとしても、その後には続きがあり、句点の前後を滑らかにつないでいくにはどうすればいいのだろうか。今、そのような問いを自分に与えている。

こうした問いを持ちながら、過去の作曲家が残した楽譜を参照したい。彼らがどのような意図を持って、どのようなタイミングで句読点を打っているのかを掴んでいきたい。それに付随して、レーガールの書籍のように、やはり本格的な作曲理論の解説書をいくつか読んでいくということを行う。作曲に関する理論的な知識がなければ、いつかどこかで行き詰まってしまうことが目に見えている。

知識は表現を縛るというよりもむしろ、幅と深度の確保された自由自在な表現に不可欠なものだと考えている。ここからまた、少しずつ作曲の技術を高めていくことが楽しみだ。2017/10/18(水)

06:42

---

## No.304: Timing of Rest

I asked myself several questions about music composition. I was thinking about how to put a rest symbol in my work. In other words, my focus was the timing of putting a rest symbol.

Furthermore, my question was how to ensure the continuity of the flow of music after I put a rest symbol. Each of my works still lacks wholeness and continuity. Therefore, one of the issues in my works is a discontinuous rest that hinders a mellifluous melody.

Good news is that I already have questions about the issues. Once I have questions, they will spontaneously start to find answers. 07:43, Wednesday, 10/18/2017

### 1660. 曲中の句読点

早朝、昨夜に湧き上がった作曲に関する問いについて少しばかり考えを巡らせていた。しかし、知識のないところから問いへの解答を見出していくことは容易なことではなかった。

知識がなくても問いを立てることができたが、それらの問いに解答するためには、実践的な知識が必要であった。そのため、書斎の机の脇にある椅子の上に積み上げられた書籍の一番上にある、エドヴァルド・グリーグの楽譜を手にとって眺めてみた。すると、色々と面白いことに気づいた。見開き二ページほどの、いくつかの短い曲の中において、休符(句読点)の使われ方は実に多様であった。

ある曲においては、最初の八小節で一度句点(もしくは読点)が置かれ、そこから曲の最後に向かっては一度も句読点が挿入されていない。一つのモチーフやテーマのようなものが、あるべき形になるまで曲が続き、あるべき形を迎えた時に句読点を打っている印象がある。

私の場合、一つのモチーフやテーマが仮にあったとしても、それがどのようなあるべき形をしているのかを掴むことがまだできない。文章執筆で言えば、自分の文章がどこに向かっているかわからない状態である。もちろん、文章においても、事前に文章の終わりを完全に予期することはできない。最後の落とし所はあったとしても、その落とし所の色や感触は、当初の予定とは若干異なることが頻繁に起こる。

---

文章の場合であれば、そのあるべき地点に向かって、言葉のある程度自由に紡ぎ出していくことができる。一方で、作曲の場合ではそれがまだ相当に難しい。もう一つ、決定的なことは、自分の中のモチーフやテーマが、あるべき形に収束していくのが極めて早いということだ。曲の中でモチーフやテーマが育つことなく、モチーフが単発なもので終わり、それが結局一つのテーマを短いものにしていく。結果として、一つの曲が全体感を欠いてしまい、さらには曲中の滑らかな連続性が確保されていないことにつながっているのではないかと思う。

グリーグの抒情小曲集の最初の作品である『アリエッタ』の楽譜を眺めてみると、一ページの曲の中に、目立った句点は特にない。へ音記号とト音記号との間に共通の休符を一切挿入することなく、曲が最初から最後まで続いている。おそらく、休符のような外見上の句切れはなくとも、目には見えない意味の句切れは曲の中にあるのだろう。

今の私が問いとして持っているのは、外見上の句切れである休符をいかに打つかということと、意味の切れ目をどのように作っていくかということ、さらには、それらの句切れを挿入しながらも、全体としての流れを確保するにはどうすればいいのか、ということである。

問いが回答を呼び込み、また新たな問いを生む。今回、そうした問いを立てることができたということは、もうその回答を知ったということとほぼ同義であり、それはすなわち、また新しい問いが生まれるということを示している。

いずれにせよ、絶えず自分なりの問いを立て、それを持ちながら日々作曲実践に向き合っていくことが何よりも重要だろう。そうした問いがあるのとないのとでは、過去の作曲家が残した楽譜の見え方が変わり、得られるものが全く異なる。

知識と技術の体系を育んでいく際に、分野がどのようなものであれ、自分なりの問いを立て、それを絶えず持ち続けることが重要になるだろう。今日も自分なりの問いを立て、問いの中で一日を過ごすことにしたい。2017/10/18(水)07:10

#### No.305: Elaboration and Development of a Motif and Theme

I usually compose music night after finishing every work on that day.

---

Yet, I took a look at Edvard Grieg's music scores in the early morning today because the question that arose last night still remained in my mind.

Grieg's music is the apotheosis of the beauty within simplicity. Although I have reviewed only his lyric pieces, they are succinct and beautiful. His music scores stimulated my inquisitive mind, and in fact, I came up with many questions about music composition.

One was how to make a motif and theme develop within a piece of music. I need to cultivate a technique for the elaboration and development of a motif and theme. My assumption is that a motif and theme can naturally develop toward as it is. Yet, the technique is beneficial to facilitate the motion for the elaboration and development.

I do not know what kind of existing technique is compatible with my intention, but I will search for it or establish it by myself if necessary. 13:32